

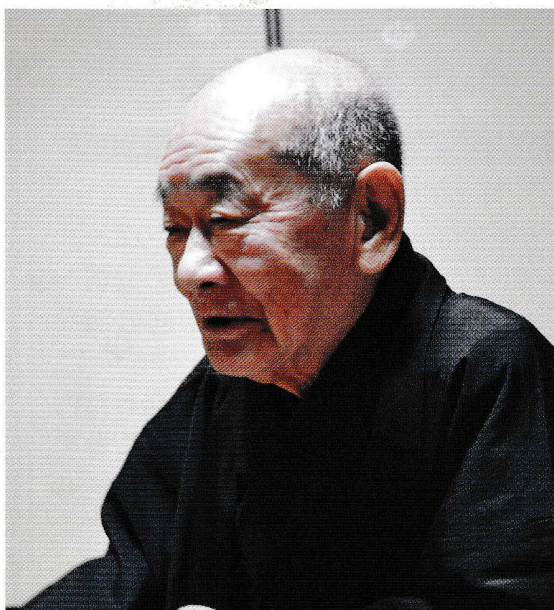
## 桑名別院を支える人々⑤

### 桑名組佛乗寺住職

五瀬泰雄さん(八十七歳)

### 篤い志に支えられて

今回は長年にわたり別院列座として、また院議会議員として桑名別院を支えてこられた佛乗寺の住職、五瀬泰雄氏に当時の教区内の状況も含め、お話を伺いました。



### ◆戦争前後の別院

第二次世界大戦前の別院本堂は、八棟造りで大きさは十間ほどあったようで、現在の書院のあたりには池があり、それを挟んで御連枝が来られた時に宿泊所となった古御殿・新御殿がありました。また、別院寺中の寺として、山門の南側に覺専坊、北側には西福寺があり、その隣には総会所、その北には佛乗寺がありました。しかし、太平洋戦争の戦火に遭い、別院ともどもすべてが消失しました。戦後、別院の復興計画で、寺地の一部を寺町通り商店街に貸すことになり、寺中は別院の裏(西)に移ることになりました。それで覺専坊と佛乗寺は現在の寺地(昔は御坊田と呼ばれた湿地)に移転を余儀なくされました。

別院の復興については、庫裡を一九四九(昭和二十四)年、油島(弥富)の庄屋さんの所から、当時のお金で百二十四万円で購入しましたが、その庄屋さんから十万円を寄付されたことをお聞きし、別院再建にあたり、別院への人びとの篤い思いが、今の私たちにまで届くような気がしました。

### ◆戦後の教区

忘れられない一つとして、一九五〇(昭和二十五)年の宗議会議員選挙を挙げられました。訓覇信雄氏が立候補するにあたり、推薦する教区の若手・壮年層が運動員として、手弁当で

教区内を泊まりがけで駆け回ったそうです。

その背景には、訓覇氏を中心として始まる伊勢学場(一九四六・昭和二十一年、開設)、三重真人社(一九四七・昭和二十二年、結成)に参加し、戦後の混乱の中で、見失われていた生きる意味を、念仏の教えの中に見出していたされた、教区の若手寺族や門徒の熱心な聞法者の自主的な集まりがあちこちにありました。

そのことを踏まえて「現在は何もかもが便利になりすぎて、膝を交えてじっくりと話し合いをするということがなくなった。学習会・研修会はいろいろあっても、車ですつと来て、終わればさっさと帰っていく。そこには本気で求道するという真剣さに欠けるような気がする」とも言われ、我々の「聞の姿勢」を問うてくださいました。

また、別院列座の一臆(いちろう)をされた経験から、まかな賄いをされていた堀田隆子さんや、誰に頼まれたわけでもなく、全くの無報酬で毎日墓地の草取り等をしておられた伊藤きぬさん等を挙げられ、別院は輪番やその他の役職者だけで維持されているのではなく、いわゆる裏方で動いてくれた方々の篤い志によって保たれていることを強調されました。

このような人びとに支えられていたからこそ別院があり、教区があることをこの度の御遠忌法要を勤めるにあたり、われわれ一人ひとりが改めて肝に命じておく必要があることを実感しました。